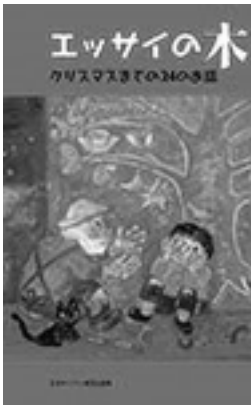


# 玉川教会たより

NO.463

11月23



▼英国では、枝分かれする木のように家系図を描く「ファミリー・ツリー」があり、イエスさまのそれが「エッセイの木」だ。旧約聖書の出来事からイエスさまの誕生へと伝わる物語が一目で分かることから、スタンドグラスと同様の役割を果たした。しかし、清教徒革命以降、「エッセイの木」は掘られた偶像とみなされ、壊されて姿を消した。それが最近家庭で復活している。以上、「エッセイの木」の著者にゆづる「はじめ」がひ。

▼気むすかしい木彫り職人の仕事場にとどこからか入り込んで来た少年が、質問し、疑問を投げかけ、或いは感嘆し、これが狂言回し

## ファミリー・ツリー

の役割を果たして、木彫り職人によって場面毎に聖書の物語が語られる。

▼これに池谷陽予さんの絵が添えられる。日本語訳の版だけのオリジナルの絵だから、添えられるという表現になるが、不適切かも知れない。とても添え物ではない。池谷陽

予さんの絵が先ずあり、これに合わせて文章の部分が記されたかのようだ。そう言うたら、今度は原作者に失礼だろうか。

▼池谷さんの絵はスクラッチという手法で描かれる。巻末に置かれた「エッセイの木」の完成図は、そのまま木版画のようにも見え、木彫り職人の仕事かと思わされる。池谷さんの原画を壁掛け絵にしたいと思ったが、それいふさわりは壁そのものがないか。

▼話を戻して、要は、聖書の物語と、職人と

少年との会話、そして挿絵が、実に有機的にと言っべきか、互いに活かされていて楽しい。一冊の本が世に出るには、原作者から始めて、多くの人の手と思いを経る。本もまたツリーだ。

▼さて肝心な原作部分だが、狂言回しを使う手法は特に目新しいものではない。二つの会話も、格別にウイットが効いているという程ではなく、聖書の物語の要約も、斬新とは言えない。しかし、何故だか、読まされる。

▼小説はティティールだと言われる。必ずしも、詳細まで緻密に描かれているという意味ではないだろう。

三人の学者は、夜空の星についてはかじりかもしれないが、ヘロデは、その星をやっつけるだけのするがしさをもっていた。

「星をやっつけるなんて、かなりうでが長くないと無理でしょう。」男の子が言うと、バターフィールドさんはうなずきながら言いました。

「ヘロデは、王さまだからえらいはずだが、気の小さい人だった。気の小さい人は、星に手がとどかなくのね。」

小説はティティールとはいついそいだ。

## 11～1月の諸集会

諸集会を覚えて、ご加祈下さい。

教会美化デー  
11月23日(日)  
ご協力下さい。

収穫感謝日  
11月23日(日)  
CSでは芋煮会を予定。

アドベント  
11月30日(日) 5  
12月24日(水)

クリスマス諸集会  
クリスマス礼拝・愛餐会  
12月21日(日) 10:30 5

教会学校クリスマス会  
12月23日(火・祝日) 14:00 5

燭火(イブ)礼拝  
12月24日(水) 19:30 5  
礼拝後、お茶の会、  
キャロリング

越年祈禱会  
12月31日(水) 23:30 5  
マナの部屋で行います。